

頼朝が通過した地点別の痕跡

2020年1月19日 県史学会講演会資料 花上雅男

	史料（吾妻鏡、延慶本平家物語等）	伝説・説話	遺跡・地形等	推理
箱根権現	箱根山別当行実は源為義（頼朝の祖父）、義朝（頼朝の父）らと親交があったため、為義、義朝の「下文」（下達文書）を保有していた。（吾妻鏡）		箱根権現から再び険しい峠を越えて海に出るという選択は現実的ではない（坂井孝一教授）	頼朝は下文を、八幡神社、江島神社で使った
	頼朝は石橋山敗退から二か月後の10月16日に、相模国早河庄を箱根権現に寄進している。（吾妻鏡） この早河庄は麾下の功将土肥実平の領地であったのを割いての寄進であった。（箱根神社一信仰の歴史と文化）			頼朝を最後に支えたのは箱根権現だった。土肥実平には、自らの領地が没収され処罰されるほどの手違いがあった。（①三浦勢の支援が得られなかったこと、②頼朝を真鶴から出航させられなかったこと） ↓ 頼朝は下文を持って愛川八幡山と江ノ島に向かった
道志村		頼朝が御正体山に一夜の仮宿を採られたとき、白井平の人が清冽な水を献納した。頼朝は喜んでその者に水越の姓をあたえ茶釜と掛物一軸を与えた。	道志村は、箱根山から50kmほどのところにある。1193年の「富士の巻狩り」の猟場に接している。	頼朝が箱根山から逃れ、たどり着いたのは道志村の白井平だった。頼朝はそのときのお礼を、3年後に富士の巻狩りの折に立ち寄り恩賞を渡した。
愛川八幡神社	海老名季貞の一家は石橋山の戦いで平家側に立ち頼朝と戦った。一族の中で、萩野五郎父子は頼朝に対して悪口雑言を浴びせ、頼朝の心を傷つけた。これにより五郎は死罪となった。（吾妻鏡）	頼朝は石橋合戦後に愛川館山（当時蛇形山、現在は八幡山）に至り、三人の村人に姓を与え、相模川を下って安房に向かった（1180）。（皇国地誌残稿） 頼朝は海老名季貞に命じて、八幡神社の堂宇や社殿の造営を命じ、1191年に建立した。（皇国地誌残稿）	八幡山早くから熊野修験の影響を受け、中世末期には本山派の由緒正しい修験として知られていた。 （遺跡として、1291年の熊野長床衆が入峰したことを示す巨大な碑が残る）。 八幡神社には海老名季貞の墓が残る。	頼朝は箱根山別当行実から為義の下文を受取り愛川八幡山に頼朝一行の保護と、船の手配を要請した。頼朝は相模平野に肥沃な領地を持つ海老名一族の豊かな財力に着目し、季貞に八幡神社の造営を命じた。
江島神社	寿永元年（1182）4月5日、頼朝が江ノ島に出かけ、頼朝の命により文覚上人が島の岩屋に弁財天を勧請した。これは鎮守府将軍藤原秀衡を鎮伏するためであったという。（吾妻鏡）		奥州藤原氏追討は、この記事から8年後のことであり、文覚上人を鎌倉へ呼び寄せる特段の理由も見当たらない⇒1182年の記述が疑問視されている（「江ノ島詣で」）	江島神社の縁起（誕生の原因や背景などの相互関係）は石橋山の戦い後に頼朝が箱根権現の下文を携えて江ノ島に逃れたことであり、治承四年（1180）のことである。
	建久三年（1190）北条時政は、子孫繁栄を願うため、江ノ島の御窟に参籠したところ、弁財天が現れ、大蛇となって消えると、三枚の鱗が残されたという。（太平記）		江島神社の社紋は北条家の家紋と同じ「三つ鱗」の周囲に波が描かれた社紋が使われている。	
房総安房・真鶴	頼朝が乗った船について。真鶴乗船時は「海人船」（あまぶね＝漁師が乗る舟）に乗っているが、安房到着時の記述は「これほどの大風に、海人船、釣り船、あきなひ船などにてあらじ」と、出航時と到着時で船種が異なる。（延慶本平家物語）	<房総安房の小浦の弁財天の伝説> 頼朝が海上通か江ノ島を眺めると、神霊が現れたので、弁財天を建立し、池を影向池と称したという ⇒三浦半島があるため、この地点から江ノ島は見えない	11世紀後半からの院政期には、太平洋の海上交通が安定した航路となり、活発な船の往来があった。（網野善彦氏） 熊野社は中世前期までには全国42の荘園を持ち、相模国には愛甲荘（厚木市）を保有していた。	当時の熊野の船といわれる諸手船は、海型の川船の特徴を維持する船で、海と河川で両用できた。 頼朝が愛川八幡神社で乗った船は、熊野と愛甲荘の交易に使われていた熊野船だった。 頼朝が真鶴から船に乗って安房に渡ったとする説は影武者の演出ないしは創作であろう。

	吾妻鏡	延慶本平家物語（日程は推測）	仮説に基づく愛川八音山ルート上での出来事
8月23日	・夕刻から頼朝方三百騎、大庭景親方三千余騎による戦いが始まる		（史書の記述に対応）
24日	・戦闘は明け方まで続く ・頼朝は険しい山を登ったところにある「倒木の上」に立つ。そこで土肥実平は「今の離別は大幸」と分散を提案した ・頼朝たちは「蔵窟」に移った。梶原景時はこの居場所を知っていたが、この山に入った痕跡はないと偽りそぼの峰に登っていった。 ・夜になって、北条時政が箱根山の僧永実を連れて頼朝の陣に到着した。 ・永実は持参した食事を献上、全員が飢えていたので千金に値した ・頼朝は箱根山に到着し、別当行実や永実が匿った。行実は、源為義や義朝の「下文」を保有していた。	（24日）・荻野五郎父子が頼朝に追いつき、罵声を浴びせた。 ・山の峰の臥木のところまで来ると、頼朝は散り散りに分かれなさいと諭した。北条時政と子息義時は、そこから山伝いに甲斐国に赴いた。 （24日夜～25日早朝？）・頼朝は鍛冶屋が入る山（しとどの岩屋）に隠っていた。その峰から土肥を眺めると、伊東入道が土肥実平の家々を焼き払っていた。 ・土肥実平はその光景を眺めて、「土肥に三つの光あり…」の舞を披露した。 ・頼朝と共に山に居残ったのは、土肥実平、弥太郎（子息）、新開の荒次郎（甥）、土屋宗遠（弟）、岡崎義実（義兄弟）、男七郎丸（小舎人）の七騎であった	・土肥山中の「小道地蔵堂」（倒木の上）に至り、集まった部下に解散を伝える ・そこから数名となった頼朝は、小道地蔵堂の上人純海の案内で「しとどの岩屋」（蔵窟）に向かう ・夜になって箱根山の僧永実が案内された北条時政父子が到着し、一同に食事が提供される ・頼朝はその夜のうちに時政父子をともなって箱根山（永実の宅）に避難する。別当行実は、頼朝の逃走先を確保するため、為義、義朝の下文を用意した。
25日	・箱根山の僧が頼朝を匿おうとしていたので、土肥実平と永実と共に土肥郷に向かう ・北条時政は、これまでの事情を甲斐源氏に伝えるため甲斐に向かうが、頼朝の到着地を見定めるために、途中で引き返し、土肥の方へ尋ねていく [波志太山の戦い] 甲斐源氏の安田義定らが富士の北麓で梶野五郎（大庭景親の弟）と遭遇し、梶野軍は敗れた		・箱根山も大庭の兵が押し寄せるといふ知らせで、頼朝は箱根権現の僧坊を出る。 ・北条時政は、周辺で待機していた加藤光員・景康兄弟と共に甲斐源氏と接触し、馬を調達して頼朝の元に戻り、永実の案内で道志村へと向かう。 ・頼朝一行（頼朝、安達盛長、北条時政・義時、僧永実の5名）は、山伏峠を越え道志村の白井平で宿を確保する。
26日	[衣笠合戦] 畠山重忠の軍が三浦の衣笠城を攻め、三浦勢は散り散りに退却した。（27日、三浦義澄らは安房国へ赴いていた）		・馬に乗った頼朝一行は、道志村の長い道志みちを抜け、愛川の八音神社（蛇形山）に至る。 ・頼朝は源為義の下文を僧に見せ、船の調達や身辺の警備を頼んだ。 ・船の調達の目途が付くと、頼朝は土肥郷で連絡を待つ土肥実平に江ノ島での集合を指示した。その使者は永実であったと思われる。
27日	・北条時政、同義時、岡崎義実、近藤七国平らは土肥郷から安房国に向け船出した	（27日？）・実平の妻の送った使者が来て、「頼朝を訪ねて安房国の方へ行きました。急いでその人々と合流してください」という連絡が入った。 （28日？）・そこで、小浦というところに出て、海人船一艘に乗って安房国に赴いた。頼朝以下七名は乱れ髪の状態、烏帽子をかぶる人もいなかった。 ・土肥実平が「この船を急いで出せ」というと、土肥弥太郎退平は己の舅である伊東入道を持ちたいといったので、親子の言い争いとなり、岡崎義実が仲裁した。やがて船を出したが、伊東入道らが攻めてきた。 （29日？）・三浦の人々が安房国の船が磯に着いて、休んでいると船が一艘見える。「あの船は見慣れない船だ。これほどの大風の中で、海人船・釣り船・商船などではない。もしや頼朝殿の船ではないか」 ・近づいて船を確認すると、頼朝は、打ち板の下に隠れていて、その上には武将が何人も乗っていた	・八音神社が調達した船は、愛甲荘が熊野との交易等に利用する熊野船だった。船を相模川の上流に引き上げるため、終日を要した。
28日	・頼朝は土肥の真鶴岬から船に乗り、安房国の方へ赴いた ・土肥実平は、土肥の住人である貞恒に命じて小舟を準備させたという		・早朝、頼朝一行は八音山を出発した。中津川から川を下った頼朝は3時間ほどで相模湾に出た。 ・江島神社に着いた頼朝は源義朝の下文を示し、食事や周辺警備を要請した。 ・午後には土肥実平の一行が到着し、洞窟内で安房到着に向けての対応を最終調整した。 ・北条時政父子は、到着地の安全を確保するため安房に向かった。
29日	・頼朝は土肥実平を連れて安房国洲島に到着。北条時政らが迎えた。		・朝、江の島を出発した頼朝・土肥実平一行の船は、安房国洲島に到着した。そこで、前日ひと足先に出発した北条時政らの出迎えを受けた。